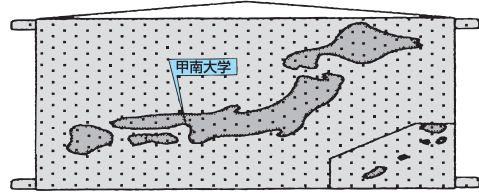


Zephyr

〈第82号〉

ゼフィール・にしかぜ



<https://www.konan-u.ac.jp/kilc>

《特集＊各国の宗教にまつわる行事の紹介》

★所長からのメッセージ：祇園御霊会の創始について	佐藤 泰弘	2
〔ドイツ語〕ドイツにおけるキリスト教と祝日	藤原三枝子	3
〔フランス語〕フランス国家の非宗教性 (laïcité) と日常生活に根付いたキリスト教由来の行事 Galette des rois ...	中村 典子	4
〔中国語〕道家・道教と日本のお中元	胡 金定	5
〔韓国語〕韓国社会にみる儒教意識の社会現象	金 泰虎	6
〔日本語〕宗教にまつわる行事から日本語の話へ	谷守 正寛	7
世界の有名な研究所 (1)	藤原三枝子	8

甲南学園創設者

平生鈞三郎

「世界に通用する

紳士・淑女たれ」



「英語＋1 (第2外国語)」
教育プログラム

「使える外国語教育」

国際言語文化センター機関紙 (年3回刊行)

世界3大宗教にみる巡礼の旅と日本

世界中には数多くの宗教が存在しており、その中でもキリスト教、イスラム教、仏教は3大宗教とされています。これらの世界3大宗教に共通してみられるのは、それぞれの宗教ゆかりの場所を訪ねる行為です。すなわち、キリスト教はそのゆかりの場所を訪問する「聖地巡礼」、イスラム教はサウジアラビアのメッカやマディーナを訪ねて行事に参加する「ハッジ」、そして仏教は釈迦ゆかりの印度や仏教と関わりの深い中国の地域を訪ねる「求法活動」という旅です。

特に、古代における韓国と日本の仏教では、求法活動ということでインドや中国を目指し、主に聖職者の僧侶が出かけていました。しかし、古代以降、韓国と日本からの求法活動は影を潜めるようになりました。その後、11世紀頃から日本では、主に修行僧や修験者が参拝をする「西国三十三所」という観音菩薩を祀る霊場である「礼所」の巡礼が始まりました。また室町時代からは僧侶が修行の一環として弘法大師ゆかりの「四国八十八箇所」を「巡拝」することも始まりました。前者の三十三所は室町中期、後者の八十八箇所は江戸時代から一般庶民も加わるようになり、時代の移り変わりはあったものの、今日に至っています。この両者の巡礼は日本仏教ならではの光景と言えますが、とりわけ後者の四国の巡礼地を巡拝する人々は「お遍路さん」と呼ばれています。

(金 泰虎)

祇園御霊会の創始について



全学教育推進機構長・国際言語文化センター所長 佐藤 泰弘

祇園祭として知られる八坂神社の祭礼は、3基の神輿が四条京極の御旅所に入り7日後に神社に戻るといふ神事です。神輿を迎える7月17日と送る24日には壮麗な山鉦が巡行する前祭・後祭が行われます。祇園祭が平安時代に始まる祇園御霊会であり、応仁の乱で中断した後に復興し現在に至ることは、よく知られていると思います。

八坂神社は、明治の神仏分離までは祇園感神院と呼ばれ、神社と寺院が一体でした。祭神も神仏分離で素戔鳴尊・櫛稲田姫・八柱御子と定まりましたが、古くは牛頭天王・婆利采女・八王子であり、神仏が多層に習合していました（鈴木耕太郎『牛頭天王信仰の中世』法蔵館、2019年）。式日も太陽暦が採用されるまでは旧暦6月7日と14日でした。御旅所は、豊臣秀吉が御土居を造って京都を大改造するまでは2箇所あり、牛頭天王・八王子の御輿は大政所（烏丸五条坊門）に、婆利采女は少将井（烏丸大炊御門）に遷座していました。

祇園御霊会の創始を同時代の史料で跡付けることは簡単ではありません。11・12世紀の御霊会は14日の祭礼であり、祇園社に還る御輿に芸能・風流の行列が伴いました。7日の御輿迎えも御霊会と呼ばれるようになるのは鎌倉時代です。

祇園の祭礼に関する確実な初見史料は『本朝世紀』長保元年（999）6月14日条です。この日は「祇園天神会」であり、祇園社の前を大嘗会の標山に似せた作り物を渡そうとしたため、藤原道長が検非違使を遣わして制止しました。この「天神会」という呼称に注目したいと思います。

10世紀を通じて朝廷・貴族は祇園（祇園社・感神院）に病氣平癒、疫病沈静、内乱平定など攘災を祈願しました。延長4年（926）に修行僧が「祇園天神堂」を建立しました。天徳2年（958）に朝廷は疫病消除のため寺院で般若会を修したものの効果がなく、石清水など11社、西寺・上出雲の「御霊堂」および「祇園天神堂」において仁王般若経を転読させました。「天神会」の呼称は長保元年の『本朝世紀』の記事に見えるだけですが、御霊でなく天神を祀る祇園に相応しいものです。この時は作り物が社頭を渡されており、祭礼の中心は祇園社にあったと考えられます。御輿送りが行われたか否かは未詳です。

『小右記』長和2年（1013）6月14日条も興味深い記事です。この日は「祇園御霊会」で、散楽の芸能者を載せた空車（荷車）が御輿に続きました。藤原道長は検非違使を遣わして芸能者を追い払い、その混乱のため御輿を「追却」できなくなりました。この記事は「祇園御霊会」という呼称の初見であり、これ以後、祇園の祭礼は天神会ではなく御霊会として見えます。またこの記事は御輿送りの初見史料です。道長の行為からは、御輿に芸能者が伴うことが定着していなかったことが窺えます。

御輿送りがあれば御輿迎えもあったはずであり、『小右記』の記事は旅所の存在を間接的に示しています。祇園御霊会は天延2年（974）に始まり、同時に大政所の旅所も成立したと伝えられています（『祇園社記』『八坂神社記録三』）。しかし長保元年の祭礼が社頭を中心とした天神会であり、長和2年の祭礼が芸能を伴い御輿を送る御霊会として揺籃期にあったとすれば、旅所の成立と御輿迎え・御輿送りの創始は天延年間に遡るのでしょうか。

10世紀末・11世紀初における疫病の流行は、船岡山・紫野今宮・花園など平安京の近郊で疫病消除のために疫神を祀る御霊会を生み出しました。走馬・歌舞・芸能を伴った御霊会が盛行するなか、病氣平癒など攘災で信仰されていた祇園の天神会も芸能の要素を加えていったのではないのでしょうか。旅所への遷御が11世紀初頭に始まったのか、すでにあった旅所の祭礼が華麗になったのか、さらに検討したいと思います。天神会から御霊会への呼称の変化は、社頭の祭礼から風流や芸能の行列をとまなう都市の祭礼へと転換したことに対応するとも考えられますが、北野天神との差別化も考慮すべきかもしれません。



ドイツにおけるキリスト教と祝日

～家族の結びつきで育まれる信仰～



国際言語文化センター兼任研究員 藤原 三枝子

ドイツのカレンダーをみると、あらためて、キリスト教に関係する祝日が多いことに驚かされます。州によって異なる祝日もありますが、ドイツ全体で共通のキリスト教関連の祝日を2022年のカレンダーからまとめると、次のようになります：

(*毎年日曜日)

4月15日	復活祭聖金曜日 Karfreitag	6月5日	聖霊降臨祭* Pfingsten
4月17日	復活祭* Ostersonntag	6月6日	聖霊降臨祭月曜日 Pfingstmontag
4月18日	復活祭月曜日 Ostermontag	12月25日	クリスマス第1日 1. Weihnachtstag
5月26日	キリスト昇天祭 Christi Himmelfahrt	12月26日	クリスマス第2日 2. Weihnachtstag

ドイツの16州全体で共通の祝日は、このほかに、1月1日：元日 (Neujahrstag)、5月1日：メーデー (Tag der Arbeit)、10月3日：ドイツ統一の日 (Tag der Deutschen Einheit) があり、ドイツ全体で祝う祝日の合計11日の中で8日がキリスト教関連です。また、この他に州がカトリックかプロテスタントかなどによって異なる祝日として、三王来朝 (Heilige Drei Könige)、聖体祭 (Fronleichnam)、マリア昇天祭 (Mariä Himmelfahrt)、宗教改革記念日 (Reformationstag)、万世節 (Allerheiligen)、贖罪の日 (Buß- und Betttag) の6つの祝日があります。例えば1月6日の三王来朝は東方の3人の博士がイエスの誕生を知りイエスのもとを訪ねたことを祝うカトリックの信者が多い州の祝日です。また、10月31日の宗教改革記念日はルターの宗教改革を記念する日として、プロテスタント信者が多い州の祝日です。



ドイツでは、復活祭とともにクリスマスが大事な宗教行事です。日本ではお正月に家族皆が家に集まるように、ドイツではクリスマスには家族が集います。ドイツのこうした祝祭については、書籍等で、詳しい情報を得ることができると思われますので、今回は、筆者が2021年12月にドイツのベルリンの家庭で体験したクリスマスを基に、家庭の中で信仰がどのように育まれていくのかを紹介します。2人の子供がいる4人家族の家庭ですが、すぐ近くに、子供たちの祖母が住んでいます。クリスマスツリーの飾りつけはドイツに由来すると言われていますが、その様子は家庭により様々です。多くのクリスマスツリーの飾りつけに見られるように、この家庭でも、キリストが生まれた時の様子を表したKrippe (クリッペ)、キリストが生まれた厩舎にやってきた3人の賢者の人形が飾られています。ろうそくは大抵の場合、豆電球ですが、この家庭では本物のろうそくを使っていました。

私が訪ねた日には、家族でクリスマスの音楽を演奏し、皆でクリスマスソングを歌いました。音楽の国ドイツを感じさせます。また、毎年行われているようですが、祖母が子供たちに、子供用のクリスマスの物語 (*Marias kleiner Esel* 『マリアの小さなロバ』) を読み聞かせてしていました。子供たちは何度も聞いているためにすっかり表現を暗記しているようですが、淡い光の中で、祖母が読んでくれる物語は、この家庭のクリスマスには欠かせない伝統であり、こうして子供たちの心にキリスト教が育まれていくのでしょう。

国際都市ベルリンには、移民を背景とする人々がたくさん暮らしています。ベルリンの総人口に対する外国籍の人の割合は、1995年末時点で12.6%でしたが、2021年末では21.5%まで増加しています。ただし、地区 (Bezirk) によりかなりの差があり、Mitte 地区ではその割合は34.8%にまで上ります。また、ベルリンで暮らす外国籍の人々の出身国の第一位はイスラム教の国、トルコですが、人々の国籍は全体で190以上に上ります。さらに、(国籍にかかわらず) 移民を背景とする人の割合で見ると、ベルリン総人口の36.6%にもなります。ベルリンは多様な文化を背景とした人々が暮らす多民族都市です。従って、自分のよりどころとする宗教とその行事も多様です。多様性の中の統一 (United in diversity) はEUの理念ですが、ベルリンはそれを具現化している都市と言えます。



参考サイト

ドイツ連邦共和国大使館：<https://japan.diplo.de/ja-ja/themen/willkommen/feiertag/951056>

Amt für Statistik Berlin-Brandenburg：<https://www.statistik-berlin-brandenburg.de/a-i-5-hj>

フランス国家の非宗教性 (laïcité) と日常生活に根付いた キリスト教由来の行事 Galette des rois

国際言語文化センター兼任研究員 中村 典子

フランスには、世界的にも有名なパリのノートルダム大聖堂 (Cathédrale Notre-Dame de Paris) やモンマルトルのサクレ・クール寺院 (Basilique du Sacré-Cœur de Montmartre) などがあり、他の多くのヨーロッパ諸国と同様、キリスト教の国であると思われがちです。しかしながら、フランスでは **1905年のいわゆる「政教分離法」** (正確には「**教会と国家の分離についての1905年12月9日の法律**」 *la loi du 9 décembre 1905 de séparation des Églises et de l'État*) により、国家の非宗教性 (laïcité: ライシテ) が定められています。これは、日本でいう「政教分離」に近い概念ですが、フランスでは、**カトリックも含めたすべての宗教は「私的空間」の事柄として捉えられ、「公的空間」においては中立性を保つことが徹底される**ことを意味します。

フランス政府が公表している最新の数字 (2019年2月調査)^{注1)} によれば、「特定の宗教との繋がりがある」と答えた人は、**カトリック (48%)**、イスラム教 (4%)、**プロテスタント (3%)**、仏教 (2%)、ユダヤ教 (1%) で、**どの宗教も信仰していない人の割合 (34%) が2番目に高い状況です**。つまり、現在、「**キリスト教を信仰している**」と答えている人は、カトリックとプロテスタントを合わせても51%にすぎません。しかしながら、フランスの日常生活に根付いているキリスト教由来の大きな行事が3つあります。**クリスマス (Noël)** と**復活祭 (Pâques)** はよく知られていると思いますので、今回は、**公現祭 (Épiphanie: エピファニー) に食べるお菓子ガレット・デ・ロワ (Galette des Rois)** を紹介します。**ガレット・デ・ロワ**は、**1月6日の公現祭**と関連しますが、一般の市民が普通に行う行事です。1月に入ると、パン屋や菓子店、スーパーの店頭には、ガレット・デ・ロワ用のケーキがいろいろと並びます (地方ごとにさまざまな種類があるようです)。1月6日は、フランスの祝日ではないため、実際には**1月1日以降の日曜日などに親しい人が集まってお祝いをする**ことが多いです。私も1月の第一日曜日にフランス人の友人の家に招かれ、この行事に参加したことがあります。

公現祭は、東方三博士 (les Rois mages) がイエスの誕生を祝うために来訪した日だとされています。**パイ生地の中にアーモンドクリームを入れたシンプルなケーキには、陶器製の小さな人形 (右の写真では馬の人形) が埋め込まれています**。もともとは、そら豆 (fève) であったため、その人形も fève (フェーヴ) と呼ばれます。切り分けられたケーキを食べるときに fève が入っていた人は、紙製の金色の王冠を頭にかぶり、皆から祝福されます。幸運に恵まれた人は、主役として一言述べるか、歌を歌うことが多いようです。そして、その幸福は1年間続く、と言われていました (幸福と関係があるためか、fève のコレクターも数多くいます。「collection + fèves」で画像検索してみてください)。



Galette des Rois (iStock.com/JPC-PROD)

ガレット・デ・ロワは、新年を迎えた後、家族や親しい人と集まって1年の幸福を願うための行事としてフランス人の日常生活に定着しています。

注1 数字の出典 <<https://www.gouvernement.fr/rapport-des-francais-a-la-religion-et-aux-convictions-chiffres-cles>>

道家・道教と日本のお中元



国際言語文化センター兼任研究員 胡 金定

道家について

道家は古代中国の学問分類における一派です。戦国末から漢代に《黄帝経》と《老子》をもとに重んずる黄老思想が流行り、世界の根源的実体たる道を根本とする考えをさらに発展させ、大小、善悪、賢愚、生死などすべての差別は、同じ道のあらわれ方のちがいにすぎず、差別にとらわれずに自由に生活を楽しむべきであると説いたのが荘子です。老子や荘子の考え「老荘思想」を**道家**と呼びます。

道教について

道教は、中国の漢民族の固有の宗教で、中国の三大宗教（儒教・仏教・道教）の一つです。道教の概念規定は確立しておらず、さまざまな要素を含んだ宗教です。老子の思想を根本とし、後漢の時代、張陵が教祖となって教団が創設されたと語られることが多いです。

道教は中国のさまざまな伝統文化の中から生まれており、中国で古くから中国人の思想や生活に大きく影響を与えています。

道家・道教と日本文化

日本と中国の文化に深く根ざす知られざる道家・道教、気づかぬうちに日本人の生活にまで浸透していた道家・道教の世界を見てみたいと思います。

何気なく行っている日本の年中行事は道教の流れをくむものも多いものです。日本文化の由来を知ること、自分の中に流れる大切なものが見つかるかもしれません。

中国道教の行事

三元とは、1年の中で上元・中元・下元の3つの日の総称です。雑節とすることがあります。それぞれの日付と、関わる道教の神は次のとおり。

上元は1月15日（旧暦）新暦2月上旬～3月上旬

中元は7月15日（旧暦）新暦8月上旬～9月上旬

下元は10月15日（旧暦）新暦11月上旬～12月上旬

三元の教えは道教の応報思想を端的に表すものです。やがて祭日としての三元と天曹神としての三官が混同され、三元そのものが三官を意味し、三官のことを三元大帝とも呼びます。後世では、上元は賜福を司る天官の誕生日、中元は赦罪を司る地官の誕生日、下元は解厄（厄は災）を司る水官の誕生日とされました。

上元

中国では元宵節は、正月の望の日（満月の日、旧暦一月十五日。日本でいうところの小正月にあたる）を祝う中華圏での習慣です。正月は別に元月とも称され、元月の最初の宵（夜）であることより元宵節と命名され、過年（春節のこと）は元宵節を迎えて終了する重要な一日です。この日を中心に色取々の灯籠を灯して夜祭を行い、この日に小豆粥を食べると、その年の疫が避けられると言われていました。

日本では、1月15日は小正月に当たったが、改暦（明治5年12月2日・西暦1872年12月31日をもって太陰太陽暦を廃止し、その翌日からグレゴリオ暦に移行、1873年（明治6年）1月1日となった）後の日本では小正月は新暦1月15日に移動しました。

中元

元々道教では、中元は人間贖罪の日として、一日中火を焚いて神を祝う風習がありました。のちには、死者の罪を赦すことを願う日となりました。

中国仏教ではこの日に、祖先の霊を供養する盂蘭盆会を催します。中元と盂蘭盆会は習合し一体化しています。

日本ではこれがお盆の行事となり、江戸時代から祖先への供物とともに、目上の人や商い先やお世話になった人等に贈り物をするお中元が派生しました。

日本以外では旧暦7月15日です。日本では明治の改暦により、お盆のように、地域により東日本（特に関東）では7月15日、西日本（特に関西）では8月15日となりました。

下元

古代中国においては先祖の霊を祀る行事だったが、後に、物忌みを行い、経典を読み、災厄を逃れるよう祈る日となりました。

日本ではこの日に行われる行事や「下元」と称する行事はないが、この前後の日に、収穫を感謝する十日夜、亥の子などが行われ、日本に伝わった下元が各地の収穫祭と結び付いたものと考えられています。



韓国社会にみる儒教意識の社会現象



国際言語文化センター兼任研究員 金 泰虎

今日の韓国社会では、世界3大宗教と言われる仏教、キリスト教、イスラム教が信奉されています。2015年の『人口住宅総調査』（韓国統計庁）の統計によると、約4900万人の総人口の中で宗教を信奉する人の占める割合は43.94%、この宗教人口の中で仏教とキリスト教（カトリック・プロテスタント）の信者を合計した割合は98.29%にも上っています。この状況は、韓国が儒教社会であると言われていたことを鑑みると、不思議でなりません。

とりわけ宗教人口の中で儒教を宗教として信奉する人の割合は0.35%に過ぎません。儒教が韓国社会に定着し、生活全般を規範する精神的な支えではありますが、宗教として信奉している人は少ないのです。この儒教が韓国社会に定着するきっかけは、仏教を国教としていた高麗王朝に継ぐ朝鮮王朝の開創です。つまり、朝鮮王朝は儒教を国家統治の理念とする「崇儒抑仏」政策を取り入れ、約500年の間に亘り堅持をしてきたからです。

この儒教思想は生活全般に及ぶ規範としての役割を果たしており、宗教に等しい存在であると言えます。その中でも祭祀（法事）を重んじており、これを孝行や礼儀の意味合いとして強調しています。例えば、『中庸』には「事死如事生、事亡如事存、孝之至也」、つまり生きている人（事生）の如く死者（事死）に仕え、存在している人（事存）の如く消え去った人（事亡）を奉るのことは孝行の極みであるとあります。要するに、死者に対し生きている人と同様に行うことが祭祀であり、これが最高の孝行であると説いています。さらに、『論語』には孔子が「生事之礼、死葬之以礼、祭之以礼」とした、つまり生きていた時の礼を死後にも祭という礼でもって行うと力説したことを記しています。

祭祀を重んずる儒教の教えは、朝鮮時代にキリスト教（カトリック）が布教されてから、朝廷がキリスト教信者に加えた弾圧、つまり迫害の口実に繋がりました。最初に朝鮮で起きた弾圧の「辛亥迫害」（1791年）は、ある両班が母を亡くし、キリスト教式の葬儀を行ったのが発端でした。すなわち、母の位牌を燃やした上、祭祀を行わなかったということで処刑されたのです。儒教を国家の統治理念として導入し、祭祀を重んずる環境の中、祭祀を拒んだことに対する処罰でした。

では、なぜキリスト教では祭祀を否定しているのでしょうか。それは唯一の神であるイエス以外の対象を祀るのは偶像崇拝に当たるからです。当時、カトリックの教皇は、辛亥迫害を重くみて朝鮮社会だけは祖先に対して行う祭祀を認めることにしました。それ以来、韓国社会におけるカトリック信者は変わらず祖先祭祀を重視し、祭祀を行っています。

実に、今日の韓国社会における「宗家」で行う毎年の祭祀は、その回数が少なくありません。朝鮮時代の伝統に基づく、種々の祭祀を行わねばなりません。現代社会に入り簡素化されています。とは言え、概ね高祖父母・曾祖父母・祖父母・父母の4代に至るまでの祭祀（忌祭祀）は維持している傾向が強いです。これらの忌祭祀は、毎年、命日の深夜に行いますが、これをもって「4代奉祭祀」と言います。つまり、一世代を30年と見なした場合、1代の祖先に対する忌祭祀は120年間も続けられます。この実情を鑑み、韓国政府は「家庭儀礼準則」（1973年）という法律を制定し、祭祀の負担を軽減しようとしたのですが、現実的に準則に基づいている家庭は多くありません。つまり、家庭儀礼準則では二世代、つまり祖父母と両親に対する祭祀だけを勧めています。一方、キリスト教の中でカトリック以外、つまり近代国民国家成立期に韓国に伝わったプロテスタントは、祖先祭祀の祭祀を偶像崇拝と見なし行いません。その代わりに、概ね命日に集い聖書を朗読し、讃美歌を歌うなどの儀式を行います。

そこで、4代奉祭祀を担う宗家は、年間、何回の祭祀を行うのかについて述べることにしましょう。祭祀の対象である4代前までの祖父母それぞれの命日8回、そして正月とお盆（秋夕）の祭祀を合わせると、合計10回です。なお、4代奉祭祀から外れた祖先に対しては弔い上げではなく、毎年10月上旬、墓の前で「墓祀」を行います。これを考えると、年間を通して1ヶ月に1回程度、しかも半永久的に祭祀を行うことになります。

祭祀は回数や期間の問題だけではなく、祭祀に供える「祭祀飲食」と言われる数多くの供え物の料理を準備する女性にも大きな負担になっています。最近、共働きの家庭では、専門業者に祭祀飲食を注文するケースも多いと言われています。また、休暇先で祭祀を行うという皮肉な話もあります。これらの現象について、逆に言えば韓国社会では未だに祖先祭祀の祭祀を重視していることの証であると言えます。要するに、韓国社会では生活の中で祭祀という儒教の規範が生き続いており、日本社会のような弔い上げという考えはほとんどないように見受けられます。



宗教にまつわる行事から日本語の話へ



国際言語文化センター兼任研究員 谷守 正寛

日本語を研究しているからといって、筆者は宗教学では門外漢であって、その専門家をさしおいて数ある行事から紹介すべきものを選んで何か特別な知見を言述する立場にないと思いますので、一言ふれたあとで日本語に関わる面から勝手なことを少しく述べるにとどめたいと思います。宗教行事などは昨今無尽蔵に氾濫するネット情報から知ることができます。では世界最大の宗教行事が行われるのはどこでしょうか。答えはイスラム教の有名なメッカの大巡礼などが頭に浮かびそうですが、その数は約二百万人とのことで、日本人は宗教色が薄いとはいえ、正月三が日に明治神宮に参拝する人が三百万人超（コロナ禍時期は別）なので、どうやら初詣が世界最大の宗教行事かもしれない、浅草寺だけでも年間約三千万人の参拝者がいるとのことで、やはり日本が世界最大の宗教行事が行われる国かと思いきや、インドにおけるヒンズー教のクンブメーラという聞き慣れないものでは五千万人超の巡礼者がいるとのことで、日本はどうやら二番目になりそうなものの全国では実は約九千万人の初詣参拝者がおり、再び日本が世界最大の宗教行事を擁する国かもしれないという意外な面があるようです。

さて受売りの情報はさておき、しかしこれは研究ではないのである程度勝手な想像も入ったエッセイになりますが、本誌のテーマに沿う格好で日本語の視点から宗教行事の周辺を少しく探ってみます。まず日本語の文法では音読みの漢語には「ご」を、漢字語でも和語（訓読み）の場合には「お」を付ける基本的な規則があります。例えば「旅行」は音読みで「リョコウ」と読むので「ご旅行」となります。この規則があまり当てにならないものだという話をします。規則に例外的なものを集めてざっとみてみると、少し強引な見方とはいえ宗教（行事に限らずですが）にまつわるかなんとか関わりそうな言葉にそういった例外、つまり音読みの漢語に「お」が付くものがけっこう多そうだということです。この接頭語の宗教との関係にふれた文献がなさそうなので、真偽は別としてこんなことでも初出になります。では以下に音読みの漢語に「お」が付くものを挙げてみましょう。

お坊さん、お賽銭、お葬式、お葬儀、お通夜、お棺、お骨、お香炉、お香、お善料、お香食、お香典、お線香、お焼香、お念仏、お布施、お仏壇、お仏像、お経、お散骨、お堂、お彼岸、お位牌、お説教、お盆、お手水、お釈迦、お慈悲、お数珠、お厨子、お地蔵、お遍路、お神酒などなどですがどうでしょうか。例えば釈迦は「シャカ」と音読みしますが「ゴシャカ」とは非常に言いにくいと感じます。これらはすべて宗教（仏教）がらみのものです。こうした仏教にまつわる身近な言葉はどれをとっても規則に従って最初は「ごー」だったのが「おー」になったとは考えがたく、当初から本質的に「おー」だったのではないかと思われるものばかりです。例えば日常語の「返事」は「ごヘンジ」も「おヘンジ」も言えるのとは違います。ほかに「お大事」は元々仏語（仏教語）で、修行して悟り出家することのようです。「お下品」「お上品」と書いてそれぞれ「おゲボン」「おジョウボン」と「お」の次は音読みし、仕草・作法などの見かけではなく内面性のことを言う仏語だったと言います。では以下に、直接宗教には繋がりにくいですが、風景的にはなんとなくお寺とお坊さんが出てきそうな、日常の行事に縁のありそうな雰囲気の話として同じく「おー」が付く音読みの漢語を並べてみましょう。

お中元、お歳暮、お正月、お年賀、お元気、お雑巾、お雑煮、お豆腐、お茶碗、お屠蘇、お味噌、お椀、お知恵、お行儀、お邪魔、お題目、お掃除、お料理、お布団、お覚悟、お世話役、お勉強、お道具、お杓、お稽古、お愛想、お怪我、お化粧、お玄関、お献立、お三味線、お習字、お杯、お上手、お醤油、お座敷、お砂糖、お散歩、お節介、お師匠、お草履、お粗末、お太鼓、お大根、お弟子、お駄賃、お転婆、お得意、お値段、お荷物、お奉行、お風呂、お部屋、お便所、お弁当、お野菜、お屋敷、お約束、お留守…

どうでしょうか。ちなみに、「仕事」の「シ」は音読みにとらえられそうですが、そもそも漢語でもなかったようです。むかし禅宗の講釈で使われた語で、現代語では「する」という意味の古語「す」の連用形「し」にやはり訓読みの「こと」がくっついたものとされ、もしやこの音読みに聞こえそうな訓読み漢語の仏語に「お」を付けたのが、こうした「お+音読み漢語の仏語」の発祥源だとしたら面白いのですが、そこは筆者の勝手な想像で真相は知る由もありません。

ライプツィヒ大学 ヘルダー・インスティトゥート 「外国語としてのドイツ語」「第二言語としてのドイツ語」の 研究と教育を牽引する研究所

(Herder-Institut Geisteswissenschaftliches Zentrum Beethovenstraße 15, 04107 Leipzig)

国際言語文化センター兼任研究員 藤原 三枝子



ライプツィヒ大学

ヘルダー・インスティトゥート (Herder-Institut) は、1409年に設立され、ハイデルベルク大学に次いでドイツで2番目に長い歴史をもつライプツィヒ大学に所属する研究所です。「外国語としてのドイツ語」(DaF: Deutsch als Fremdsprache) および「第二言語としてのドイツ語」(DaZ: Deutsch als Zweite Sprache)に関する研究機関として、大学に所属する研究所としてはドイツ語圏で一番長い歴史をもち、この分野の研究を牽引し続けている最大の研究所と言えます。

ヘルダー・インスティトゥートの設立は1956年に遡りますが、東西ドイツが統一した後、1993年以降は、ライプツィヒ大学において言語・文学・文化に関する学部である文献学部 (Philologische Fakultät) に属し、分野としては、ドイツ語教授法、言語学、応用言語学、音声学、文化研究に分かれています。研究と専門教育、並びにドイツ語教員の養成を主な任務とし、ホームページ上には、その行動指針が次のように示されています。

ヘルダー・インスティトゥートは、外国語および第二言語としてのドイツ語に関する最も長い歴史をもち最大の研究所として、この分野の研究、若手研究者の育成、優れた DaF・DaZ 教師の養成、さらに外国語教育、授業運営、カリキュラム開発、文化仲介、異文化理解、大学教育の分野で学術的にも実践的にも優れた指導者を養成する責任を担っている機関です。

現在、約 600 名の学生が学んでいますが、留学生も少なくありません。教育面では、学士号プログラム、さまざまな修士号プログラム、博士号プログラムを提供しています。加えて、「外国語としてのドイツ語」「第二言語としてのドイツ語」のための「大学教授資格」(Habilitation)の取得も可能です。日本では、教授の採用は各大学の規程・裁量にゆだねられていますが、ドイツでは大学教授になるためには原則大学教授資格を取得していることが要件となります。ヘルダー・インスティトゥートはこの分野における最高の学位を授与することができる教育・研究機関とすることができます。

ヘルダー・インスティトゥートがこの分野においてドイツ語圏で一番長い研究の歴史を持つ研究所であることは、1964年以來、理論的研究、実証的研究や教材分析、書評を内容とする学術誌 *Deutsch als Fremdsprache – Zeitschrift zur Theorie und Praxis des Faches Deutsch als Fremdsprache* 『外国語としてのドイツ語－理論と実践のための学術誌』(Erich Schmidt Verlag) を発行し続けていることにも示されています。年4回発行される本学術誌には、世界中の研究者・教育者の論文等が掲載され、この分野において現在、何が重要なテーマとなっているのかを知ることができます。



年4回刊行される学術誌
Deutsch als Fremdsprache

参考サイト <https://www.philol.uni-leipzig.de/herder-institut>